

Editor's Note

講評

今年度は、卒業論文を提出する資格をもつ学生数は3名でしたが、昨年度に引き続き、めでたく全員が期日内に提出しました。

堀江隆太くんは、プレ卒からラバーハンドイリュージョン (RHI) と共感性の関係について検討を行なってきました。プレ卒実験においてすでに実験遂行手続の洗練化、高度化の工夫に見るべき点が多かったのですが、卒業論文研究においてそれがさらに高いレベルに進化しました。自ら開発したLED レーザー光自動照射装置を用いて、1年間に3つの実験を行い、RHI と共感性の関係について、共感性尺度に含まれる下位尺度の一つである他者指向的反応傾向が高い人ほど絵筆同期による RHI が生起しにくいこと、一方、レーザー光による RHI は、別の下位尺度の一つである視点取得傾向が強い人ほど生起しやすい身体感覚錯覚であることを明らかにしました。独創性と努力、そしてとりわけこの結論に到達する論理の明快さが副査の中沢教授からも高く評価され、本年度の心理学科優秀卒業論文賞に選出されました。

久万歩奈美さんも、プレ卒から一貫してオノマトペの連想リストを用いた虚偽記憶研究を行ってきました。卒業論文では、自ら作成したオノマトペの DRM リストを用いて、実験1と2では大学生を対象として連想リストの感覚モダリティ（視覚と聴覚）による虚偽記憶の発生率を検討し、視覚提示の方が発生率が高いことを見出しています。実験3では、幼児を対象として連想リストを聴覚的に提示し、実験2の大学生のデータとの比較を行っています。虚再生数の絶対値では、成人の方が多いが、全再生数における虚再生数の比率では幼児の方が多く見出しました。DRM リストの作成から、それを使って虚偽記憶が幼児と成人でどのように異なるかなどを緻密に検討した独創性の高さと努力などが、副査の大久保教授によっても高く評価され、久万論文も本年度の心理学科優秀卒業論文賞に選出されました。

延藤美幸さんも、プレ卒以来、音声や表情に含まれる感情の認知を研究対象としてきました。卒業研究では、他者が表出する音声や表情の背後にどのような感情があるのか、それを受け取る側がどのように認知するかについて、受け取る側の特性不安の高低の影響を検討しました。当初の仮説とは異なり、特性不安は他者感情の認知には影響を及ぼさないという結果になりましたが、受け取り側の特性不安の大小にかかわらず、ネガティブな「恐れ」の感情は音声刺激の方が表情刺激よりも認知されやすいが、ポジティブな感情は音声刺激でも表情刺激でも認知しやすいことなどの結果が得られ、自然な音声や表情に含まれる感情認知に関する先行研究とほぼ一致する結果を得ています。この研究分野は実験遂行上、きわめて微妙で難しい制御が必要となります。従来より多くの刺激水準を採用しながらも刺激統制を強化することで、きわめて難しい研究分野にチャレンジしたその努力は高く評価されます。

今年はプレ卒研究論文として4本の論文が提出されました。

羽野由希絵さんは、状態不安および肯定的・否定的感情の高低が睡眠の質に及ぼす影響を質問紙によって調査しました。不安傾向が高いほど睡眠の質が悪いこと、否定的感情は睡眠の質との関連が見られなかったが、肯定的感情は睡眠の質との関連を有することを見出しています。今後は睡眠の質の主観的評価のみならず客観的指標を測定する方向で研究が展開すると思われ、その成果が期待されます。

杉本瑞樹さんは、他者を説得するというコミュニケーション場面において、カタカナ語の使用が受け手にどのような印象あるいは評価をもたらすかについて検討しました。操作した変数は、聴衆の人数（多数か1名か）と聴衆の知識水準（専門家か、話者よりも知識が低いか）で、使用されるカタカナ語の適切性を評価させています。新しい分野で先行研究が少なく予備的検討段階にありますが、今後の進展が期待されます。

塩島由依さんは、大学生における「希望」意識を主たるテーマとして、質問紙法によって、希望意識と自己肯定意識、希望意識と職業忌避的傾向との関連について検討しています。その結果、自己肯定意識が高いほど希望意識が高くなること、また職業忌避的傾向については「具体的な見通し」を高めることが職業忌避的傾向の抑制につながるなどを見出しています。多くの心理学研究がネガティブな心性に注目する中で、「希望」というポジティブな側面に着目した点で今後の展開が期待されます。

田代美冬さんは、ヒトが他者の意図を理解する過程、すなわちマインドリーディングの過程を、ディレクター課題によって実験的に検討しました。課題を解決する際、私的発話（いわゆる独り言）が多い人のほうが他者の意図理解を高めるといふ仮説の元、私的発話傾向尺度で測られた傾向の高低を独立変数として実験を行いました。仮説は支持されませんでした。このディレクター課題は、幼児から大人まで同一の状況で他者理解の程度を測定できることから、来年度は幼児を対象とした研究へと展開することで、意図理解の発達様相が明らかとなることが期待されます。

（2017年3月15日 山上 精次）